



「こんにちは 市長です」

11月1日号

「今でもガラケー？ そんなの格好悪いですよ。スマホにしてください」と職員に言われてスマホにかえた。常識的な範囲で使える機能を入れてもらった。買って3カ月もたったが電話とメール、たまにニュース、でもニュースは新聞を読むから実質的にはガラケーもスマホもあまり変わってはいない。聞けば、スマホは何でもできて至極便利だということに全く使いこなせず、アナログ人間のまま生きていく。「ああ情けなや、トホホ…」である。10年も前のこと、電車に乗るのに切符を買わずにスマホを改札口でかざすとバーが開いて急ぎ足でホームに向かうサラリーマンを見た。キオスクで弁当買ってお茶買って、現金でなくてスマホを店員に差し出す。都内の駅の風景が変わった。ひどくショックであった。料金表を見て行き先までの切符を買って改札口を通過してホームに、という当たり前の日常は無くなっていた。そのうち無人のコンビニが登場する。その瞬間、私などは世の中から置いてきぼりになったことを確信する。「あの頃は良かったなあ！」と古い頭のアナログ人間がため息をつくのも遠くはない。

コロナ不況で「持続化給付金」が配られた。それもスマホを使って、国から委託された業者に申請・支給される仕組み。「税理士さんをお願いしたら『フリーパス』、すぐに2百万円もらえた」と知り合いは『簡単』を強調した。5兆1千億円も用意された。学生がアルバイト感覚で給付金を詐取する事件が頻発したが、スマホでは窮状にある経営者か学生か判断はできない。相手の顔も見ずに現金（税金）を配るのはいかななものか、古い人間は思う。

われらスマホの使えないアナログ人間は確実に置いてきぼりである。「老人党」とやらをつくってアナログ人間の基本的な人権を守る政党が必要になったみたいだ。（10/19記）